

『続古事談』写本（フェリス女学院大学附属図書館蔵）の

翻刻と国語学的私注〈3〉

勝田耕起

はじめに・凡例追加

本稿は、同名論文〈2〉（『玉藻』五六号、二〇二二年三月）の続きである。【注釈】中の用例は、問題にしている語の漢字にフリガナがある場合は原則としてそのまま示し（例、明日^{アシタ}）、語形の確認のために大きく表示したい場合は漢字の下に山括弧でフリガナを示した（例、明日^{（ア）シタ}）。漢文の用例は、問題にしている語句以外の部分に原文に無い要素（文脈理解のための句読点や返り点、推定される読み等）を付した場合がある。

【翻刻】

（8）一条院の御時^{（おんとき）}、大地震*のありける日、冷泉院*仰せられけるは「池の中島*に幄*を立てよ。おはします*へき事あり」と仰せられければ、人、心得す*思なから*立て、御簾かけ、莛*敷き*たるに、午時*はかりに渡り給にけり。其後、未時はかりに大地震ありて、遅く出つる人*はうちひしかれ*けり。人々此事を問奉りければ、「去夜*の夢に九条大臣*来て『明日*の未時に地震あるへし。中島におはしませ』と告げ*つるなり」とそ仰せられける。さく人涙を流し*けり。彼大臣の霊*つきそひて*まもり奉るなるへし。

【注釈】

○大地震 音読みか訓読みか。色「地震ヂシン」(チ疊字)、「地震ナキフル俗云」(ナ疊字、黒川本。二巻本には左傍訓として「ナヘル」がある)。「驚ナキ地震也」(ナ辞字、黒川本)。長門本平家「馬の馳せちがふ音、大ちしん、いかつちの如し」(巻一六・一谷合戦事)、天草ヘイケ・四・二二「ソノコロ daigixinga アッタ」、宇津保物語・楼上・下「神いと騒がしくひらめきて、なるのやうに土動く」、方丈記「ヲヒタ、シクヲホナキフルコト侍キ」(大福光寺本)。ちなみに日本言語地図263図「地震」では、九州東南部から沖縄・先島諸島にかけてナエ・ナイ・ネエが広く分布し、青森・岩手・佐渡にも語形が見える。「ジシン類(漢語)とナエ類(和語)の歴史的関係は、分布から見て、ナエ類が古いと言つてよさそう」(『国立国語研究所報告』三〇一六〔別冊〕、一九七四)とある。

○冷泉院 「冷」は呉音リヤウ、漢音レイ、推定音²⁵⁾で韻尾が鼻音。「泉」は呉音セン・ゼン、漢音セン。広韻によれば「全」と同音で、「全」は韻鏡22転歯音全濁四等²⁶⁾ *tsien*。源氏物語絵巻詞書には「れせゐんのみかと」(竹河)とある(田島毓堂編『源氏物語絵巻詞書索引』汲古書院、一九九四による)。源氏物語大成によれば、漢字表記も少ないが大島本は「れせい院」を中心に(竹河、橋姫、総角)、「れせいゐん」「れんせいゐん」(鈴虫)、「れいせん院」(御法)とあり、その他伝本には「れんせい院」(御物本)、「れいせい院」(肖柏本、国冬本)、「れいせむゐん」(池田本、三条西家本)とあって、現代の常識的な読み「れいせい(いん)」と記すものは少ない。冷泉(レリゼン)という韻尾撥音(鼻母音)の違いを反映したものが。「平家読み方一覽」(旧大系下巻四七八頁)には「これんぜいのいん」後冷泉院」とある。『ロドリゲス日本大文典』三巻「日本の帝王と年数」には冷泉院と後冷泉院を「Dajin」[Goraijin]と記しており、頭子音のDは誤りだが、この時代の「冷泉(レイゼン)」という語形の確例といえる。古本節用集の付録「京師²⁷⁾九陌名」には「一条…冷泉」があり、四種類の表記が見られる。

レイゼン…天正十八年本、饅頭屋本、黒本本、弘治二年本、経亮本、龍門文庫本(室町中期写、天文十九年写)、岡田希雄旧蔵本、阿波国文庫旧蔵本、京都女子大本

レイセン：永禄二年本、天正十七年本、増刊下学集、枳園本（左傍訓はレンゼイ）

レンゼイ：易林本、伊京集（ただしレイゼイとも読める）

レイセイ：広島大学本増刊節用集

その他、元龜二年本運歩「冷泉レイセン」「冷泉院^{セイイン}」、静嘉堂文庫本運歩「冷泉レンゼイ」「冷泉院レイゼイイン」。春林本下学集「冷泉（レイゼイ）」は左傍に「レン」とある。下学集他本はレンゼイ・レンセイが多い。

○中島 庭園の池中にこしらえた島。後撰集「かの院のなかしまの松をけづりてかきつけ侍ける」（雑一・一〇九三・詞書）。字類抄になし。

○幄^ウ 「色」幄^ウ アケハリ大帳也」（ア地儀、掲出字に入声点あり）。朝廷の儀式等の折、参列者を入れるため臨時に庭に設けた仮屋。以下の例のように字音のアク、訓のアケハリとも用いられたようである。宇津保物語・国讓中「櫛の蔭に時蔭、松方、近正ら、（略）参りてあくうちて居たり」、打聞集・二二・麼等聖弘弘法事「東の方には二色のあくを長く立て」。和名抄・六一「幄四声字苑云、幄（於角反阿計波利）大帳也」、宇津保物語・俊蔭「御前にすなごまかせ、前栽植多させ、あげばり新しく打ちて」、栄花物語・鳥辺野「諸大夫殿上人などはあげばりに著きたり」、『江記』寛治七年（一〇九三）十月二日条（元亨四年具注曆裏書）『江記逸文集成』に同話があり「池中嶋可立幄」とあるが、伝承関係については「出典と見なし得るかどうかは一考を要する」という（『注解』五一頁）。その他、「アクヤ」という語が江家次第（一一一一頃）九・行幸神祇官儀「次大臣還幄屋」、平家物語等にある。

○おはします 自敬表現。「私がそこに移動なさるべきことがある」。自敬表現の概念と近年までの研究史については福島直恭「自敬表現と絶対敬語」（『学習院女子大学紀要』一二、二〇一〇）参照。

○心えす 事情がわからない。不審に。徒然草・七八「物の名など心得たるとち、片端言ひ交し、目見合せ笑ひなどして、心知らぬ人に心えず思はする」。

○なから 日国補注「ながら」の他に「つつ」があり、上代は後者が圧倒的に優勢であったが、中世「つつ」が衰え

たことと相まって、近世以後は「ながら」が一般的となる。続古事談にはツツは二例、ナガラ（動詞連用形接続）も二例。ナガラとツツそれぞれの接続形式としての表現性の違いと史的接点については山口堯二「て」「つ」「ながら」考」（『国語国文』四九の三、一九八〇）参照。

○庭 色「庭ムシロ麴同」（ム雑物、黒川本。「麴」は席の俗字。六朝・唐代に使われた〈学研漢和大典〉）、観「庭ムシロシキ物ホヒコル」（仏上六二）。靈異記・下・三〇「床立、敷席（前田本「麴」）、備食」（真福寺本訓釈席ムシロ）、蜻蛉日記「ただのむしろの清きに敷き替へ」（天禄二年二月）

○しき 色「敷シク布鋪設（以下十字略）已上同」（シ辞字）

○午時 むまのとき。枕草子「六七月の午ひつじの時ばかりに」（二一七・わびしげに見ゆるもの）
○をそくいづる人 逃げ遅れて建物から出られなかった人。7話「をそく」注釈参照。

○うちひしか（れ） ヒシグ（四段・他動詞）は枕草子に「蓬の、車に押しひしがれたりけるが」（二〇六段）とあり、現代では「うでひしぎ十字固め」のような関節技の名称の中に残る。物理的にツプス意で、現代語のように「うちひしがれる」で精神的ダメージを負っている状態を言うのは新しい。太平記「近づく敵あらばただ一打ちに打ち拉かんと」（卷三二・山名右衛門佐為敵事、西源院本。天正本は卷三一）、玄玖本は「唯一打二打蟄ント」と振り仮名がある。

日ボ「Velitfixigu, gu, ida 割る、あるいは、細かに砕く」。旧大系（十二行本活字本）の義経記に「太刀の脊にて散々にうちひしき」（三二・弁慶義経に君臣の契約申事）とあるが、新全集（田中本）は「散々に打つ。」で異同がある。続古事談のウチヒシグは早い例かもしれない。ヒシグ（下二段・自動詞）も古く、宇津保・祭の使「冠の破れひしげて」、源氏・総角「胸もひしげて」、宇治拾遺物語・一二七「蛙まひらにひしげて死にたりけり」の例があり、それぞれ一例ずつだが異文は無い。

形・意味とも似たものにヒサグ・ヒシャグ（四段・下二段）がある。色「拉ヒサグヒシグ（四字略）蟄 已上同」（ヒ辞字）は両者が同語の異形態であることを示す例だろうか。方丈記（兼良本ほか流布本系）の大地震の条には

地の動き、家やぶるる音、雷に異ならず。家の内にをれば忽ちにうちひしけなんとす（大福光寺本「ヒシケナントス」）。〈中略〉その中に、ある武者のひとり子の〈中略〉遊び侍りしが、俄かに崩れ埋められて、あとかたなく、ひらにうちひさかれて（後半は大福光寺本ほか古本系に無い部分）

とあり、意味差は見いだせない。温故知新書「拍破 ウチヒサク」（ウ態芸、福富長者物語「平にうちひさがれたる烏帽子」とあって、中世の共存状況の整理は必要。

また、『江記』同話の対応箇所には「被圧伏」とある。漢語「圧伏」は字類抄類に無いが、十世紀の『旧唐書』に「孝逸從^二其言^一、進^レ兵、擊^レ超^二賊衆^一、圧伏。官軍、登山急擊^レ之、殺^二數百人^一」（卷六十・宗室伝）とあり、漢語としてすでに入ってきていた可能性もある。また、「圧し伏す」あるいは「圧し伏す」と訓じたことも考えられる（ヘシフスは古今著聞集で狸を押さえつける例、オシフスは新訳華嚴経音義私記〔七九四年〕に「抑」字の和訓がある）。その場合は先行文献の和語「ヘシ（オシ）フセラレ」が統古事談で「ウチヒシガレ」に改編された理由・表現効果を考えねばならない。

○去夜 10話にも「去夜」があり、94話に「去にし年の夏」がある。「去夜」の例は中右記・大治五年（一一三〇）十二月一六日「去夜夢想云、…」、台記・久寿二年（一一五五）五月一日「去夜より大将病惱す」といったものがあり、連体詞的「去」字は「いぬる・いにし・さんぬる」と読む可能性がある（峰岸一九八六、五三四頁）。峰岸同書は「説話文学作品に見える記録語」として「去シ弘安元年夏比」（沙石集・七の二四）、「去ヌル永和年中二」（三國伝記・四の二一）を挙げる。

読みの確定できるものとして、宇津保物語には「いぬる年の十五夜に」（蔵開中）、「いぬる二月十二日」（忠こそ）ほか二例の異同の無い例がある。源氏物語には「いぬる十日のほどより」（若紫）、「いぬるついたちのひ」（明石）の二例（異同なし）の他、「いにし」とし、京を別れし時」（須磨）がある。院政期訓点資料では、大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点（一〇九九年）九「去（イヌル）月一日」、神田本白氏文集天永四年点（一一一三年）四「去（インシ）年」

と、イニシの撥音便形インジが見える。鎌倉時代の例として東関紀行「去にし承久三年の秋のころ」(今の浦ノ前島)、春の深山路「去にし文永の初めつかた」十一月十八日(一二八〇年)などがある。ところで高校古典教科書によく掲載される『方丈記』大風・火事の条「いんし安元三年四月廿八日かとよ」は、恐らく仮名書きの兼良本を根拠に、大福光寺本「去安元三年」(漢字表記)を読みやすく訓読したものである。イニシとする教科書や注釈書も多い(築瀬一雄『方丈記全注釈』四二頁補注に考察あり。築瀬はインジと読む)が、古本系諸本には「さんぬる」「さりし」はあるけれども「いにし」は見えない(青木伶子『広本略本方丈記総索引』による)。

その「さんぬる」は高山寺本古往来(院政期点)に「去(サヌル)夏比」(高山寺資料叢書第二冊)六四頁、尼しやうしやう讓状に「さんぬるてんふく二ねんに」(弘安五年(一二八二)七月二十日、鎌倉遺文一四六四七)とあって、インジ同様、院政期以降に例が見える。延慶本平家には「去ヌル保元元年」「去ル夜」など読みの確定できない例しかない(「去夏比」など送り仮名の無いものが六八例)が、長門本平家には「さんぬる仁安の比」(巻一)など元号前の仮名書き例が五つある。本項目で問題にしている「去夜」の読みについては、イヌル・イニシ・インジ・サンヌルの候補のうち、サンヌルだけ平家物語高野本写本に「これはさんぬる夜、御寝のならざりしゆへなり」(巻四・橋合戦)と「夜」という単語を直接修飾する例が確認できているので、「サンヌルヨ」としておく。なお、サンヌルは「去りぬる」の変化と言われるが、サンヌルより古い例は未見。後世のものに「興をつくされ侍る中にも、さりぬる卯月廿六日にてありしやらん、常の御所に行幸御幸ありて蹴鞠の御会あり」(山の霞、一四七〇年)がある。『おうふう』は「きぞ」と読む。万葉集「うちひさつ宮の瀬川のかほ花の恋ひてか寝らむ伎曾も今夜も(東歌)」(一四・三五〇五)〇九条大臣 藤原師輔(九〇八〜九六〇) 〓冷泉院の外祖父(の靈)。

〇明日【色】「明日アス」(ア天象)。ミ疊字(黒川本、二巻本)に「明日」は無し(明暁、明旦などはある)。日ポ Mitouchi。古事記・下・歌謡「置目もや 淡海の置目 阿須よりは み山隠りて 見えずかもあらむ」、竹取物語「翁年七十にあまりぬ。けふともあすともしらず」。アシタは「朝」の意から「翌朝」を指すようになるが、今日から見た「翌

日」をいう例として早いものは北野本孝徳紀「若（し）法師今日亡^シナ者、朕^皇從（ひ）て明日（アシタ）亡^シナム」（白雉四年五月）鎌倉初期点（『国宝北野本日本書紀』卷二五、貴重図書複製会、一九三二）。

○つけ [色]「告ツク（以下一八字）已上告也」（ツ辞字、黒川本）

○なかし 三巻本には「流ナカレ」（ナ辞字、黒川本）しかない。二巻本は「流ナカル」とあって、三巻本と同じ「ナヅム」と「ナンゾ」の間に位置しているのので、黒川本は「ル」を「レ」と書き損じたものと思われる。十巻本もナガルのみで、他動詞形のナガスは無い。○観「漂ウカフタダヨフナカス（他略）」（法上・四）

○靈 呉音リヤウ、漢音レイ、和訓スタマのいずれか。日国「りよう」は「たたりをなす生靈・死靈など。怨靈。ろう。」として、角川古語大辞典も同様の記述だが、漢字「靈」自体に悪い意味はない。源氏物語・柏木「陰陽師なども、おほくは、女のりやうとのみ、うらなひ申しければ」、葵「この御生靈^{いんぎょう}、故父大臣^{こちちおおじん}の御らうなどいふ者あり」、米沢本沙石集・九・一「嫉妬ノ心激シクシテ（中略）或ハ靈トナリ、或ハ蛇トナル」、以上三例は悪靈。宇津保物語・蔵開上「此の蔵、先祖の御れい、開かせ給へ」と祈り給ふ」、名語記・八「すだま如何。靈の字也。」

○つきそひ（て） 意味は現代語よりやや広い。いつごろから使われ始めた語か。次のように異同も多い。

① 高野本平家物語「内侍とてゆうなる女ども（中略）よるひるつきそひ奉り、もてなす事かぎりなし」（卷二・徳大寺厳島詣。流布本「付添ひ参らせて」。※長門本、延慶本なし）。

② 長門本平家「此の三年がほどはつきそひ奉る事も候はねども」（卷十、文覚房発心因縁事）。

③ 金刀比羅本保元「汝らつきそひては防戦はむざらん」（中、新院左大臣殿落給事、※半井本なし）

④ 金刀比羅本平治「すこしなぐさみ給へる気色なれば（中略）いだきつきそひたてまつらず」（下・夜叉御前。半井本「付添奉ラス」。※学習院本なし。旧大系補注三三七頁は、このような女性関係説話は金刀比羅本が「最も詳細で、源氏の末路の悲しみを女性の愁嘆によって盛り上げようとした」原典への追補部分と見る）。

⑤ 住吉物語・上「姫君の乳母子に侍従と申す女房あり（中略）これのみぞ朝夕付き添ひたてまつりける」（新

編全集Ⅱ大東急記念文庫一位局筆本。新大系Ⅱ慶長古活字十行本「是ぞ姫君につきそひて」

⑥ 太平記「只一人付副たる中間を相そへられて、遙遙と佐渡国へぞ下ける」(二・長崎新左衛門尉意見事、旧大系Ⅱ慶長八年古活字本。※玄玖本は「付纏タル中間ヲ、天正本(新編全集)は「付き纏ひ奉る雑色を」)。続古事談には異同が無い(『注解』校異による)。

【翻刻】

(9) 河内（かふち）前司（せんじ）*重通と云者、童（わらわ）*にて西宮にありけるに、みち悪（あく）しかりける所に、歩（あゆ）みの板（いた）*を三四枚（三四まい）*はかり敷（し）き渡（わた）したりけるに、朱雀院の方より白髭（しろひげ）*なる翁（おきな）の髻（むす）はなち*たる、櫛（かみ）をとりて*この板を渡らむとしけるを、この重通か稚（なま）くて*板（いた）の端（は）を踏（ふ）みて動（うご）かしたりければ、此翁（このおきな）ひれふし*にけり。朱雀院の方より蔵人（くらにん）*二人はしり来て手を引（ひ）て帰（か）り*にけり。後にきけは冷泉院のおはしましけるなり。いと奇（あや）しき*事なり。

【注釈】

○河内 和名抄「河内 加不知」(五・国郡部・畿内国)。「色」河内カウチ(カ国郡)。文明本節用集「河内(カワチ)」「カ天地」。古語大鑑「こうち(河内)」補説には「古くは『かふち』が一般的であり、『かはち』が主流になるのは中世末期以後である」とある。蔵中進「(カフチ)考」(河内)と「開中」(島田勇雄先生退官記念ことばの論文集)。(前田書店、一九七五)は、「カハ+フチ」語源説の否定とカフチの地形的原義を述べたもの。

○前司 前の国司。古語大辞典「ぜんじ」には「古くは『せんじ』とも」とあり、語誌に「平曲ではセンジが標準だったらしいが、天草版平家物語には「ゼンジ【eni】」とある。」との記述がある。延喜式「新司、不載前司所執」(卷一 一太政官)。源氏物語・宿木「常陸のせんし殿の姫君の」。「前」は呉音ゼン、漢音セン。韻23 転齒音全濁四等で韻尾はn。「司」は8 転齒音全清で【kan+s】となり連濁する。「国司」は日本書紀などにも見えるが、「前司」の延喜式(九二七)

以前の例は未見。現象だけ見ると「呉音形（センジ）より漢音形（センジ）が古い」という珍しいケースになるが、漢音推奨時代の国の役職名的なものだから漢音読みで、その後「前」字の呉音の勢力が増した、ということだろうか。

○童 語形変化は、わらは↓わらはべ↓わらうべ↓わらんべ↓わらべ、と考えられ、ワラワが生き残りつつ鎌倉時代までにワラベまでの語形が出現しているが、字類抄「童 ワラハ」（ワ人倫、名語記・二「童部」をば、わらべ、下部をば、しもべなど、よめり」とあるので、「童」字はワラワと訓じていいだろう。

○あゆみのいた 延喜式「歩板十枚」（五・神祇・齋宮・造備雑物）、夫木和歌抄・二一「みちのくの小川の橋のあゆみ板の君しそむかば我もそむかん」、平家物語・八・水鳥合戦「中にむやるを入れ、あゆみの板を引並べ」。

○枚 呉音マイ、漢音バイ。源氏物語・須磨「白き唐の紙四五まいばかり」、名語記・五「紙などを一枚、二枚といへる、まい如何。答、まいはひら也、ひとひら、ふたひら、也」。色「枚 ヒラ」（ヒ員数）。「葩ハナヒラ」（ハ植物）は〈花＋ヒラ（普通名詞）〉の複合語。日ボ辞書に「紙三四枚」を「カミ soximat(サウシマイ)」と表記した例があり、変化前の想定される形は「さむしまい」。

○しらひけ 万葉集・二〇・四〇八「ちちのみの父のみことはたくづの之良比氣の上ゆ涙たり歎きのたばく」、梁塵秘抄「白石しらひけ白専女」（巻二・四句神歌・神分）、万葉集・八九二では「比宜」と濁音仮名が使われているので上代からヒゲでいいだろう。右の「之良比氣」の「氣」は清音仮名だが、「万葉集では、清音仮名をもって濁音を写したと見なされる場合がややふえる」（時代別国語大辞典上代編「上代語概説」二章・橋本四郎）。また、複合語後部要素の二拍目が濁音だから、「シラヒゲ」にはならないが、「鬢髭」は日ボに「Bimigue(ピンピゲ)」の例がある。

○もととりはなち 「冠や烏帽子をかぶらず、髻をあらわに出す。不恰好で礼儀に反する姿。大鏡・四・道隆「三所ながら、御もとどりはなちておはしましけるは、いとこそみぐるしかりけれ」、堺本枕草子・むとくなるもの「翁おきなのもとどりはなちたる」（一八三段。旧大系底本岩瀬文庫〈両類本〉二二五段も同文）、平家物語・三・公卿揃「東帯ただしき老者が、もとどりはなちてねりいでたりければ」等いずれも身なりの乱れた描写だが、この「はなつ」はどういう

意味か。日国は「くつついでいる状態のものを、解いて分ける。その対象から引きはなす」として古今著聞集の「本鳥をはなちて」(一六・五七六)を載せるが、むしろ「牧草地に牛をハナツ」のような、「拘束を解く」感じだろ
うか。日国には別の意味区分として「解放されたような状態に変化させる。開いた状態にする」があるが、用例は「格子をはなつ」で、対象の在り方が異なると思われる。元和本和名抄「髻(和名毛止々利)」(三・形体部毛髮類)。

○すそをとりて [色]「裾 スソ」(ス雑物)。源氏物語「この侍従(中略)馬に乗せむとすれど、さらに聞かねば、衣のすそをとりて、立ち添ひて行く」(浮舟)

○おさなく(て) [色]「稚オサナシ少庸児幼种已上同」(オ人事・黒川本)、「不肖オサナシ不了同」(オ量字・黒川本)。歴史的仮名遣い「をさなし」。

○ひれふし 江記「重通踏板一端、令動揺、翁則平伏」とある。「ヒレフス」「平伏」に転倒の意味はなく、「板を動かしたので翁は(無様に転倒して)うつぶせになってしまった」ということだろう。[色]「帖ヒレフス」(ヒ人事)、「蝶臥ヒレフス」(ヒ量字)。

○蔵人 [色]「蔵人 クラウト」(ク官職・黒川本)。二巻本、十巻本に和訓なし。古語大鑑補説「平安時代には「くらうど」と読んだ確かな例は得られず、仮名で「ひと」か「人」と漢字表記されている。院政期に「くらんど」と撥音便になった例を認めることができ、「くらうど」とウ音便の早い例は鎌倉時代中期まで下る。源氏物語・桐壺「大蔵卿、くらひと仕うまつる」、源氏物語・若紫「かくいふは播磨の守の子の、くら人より今年かうぶりえたるなりけり」、高山寺本古往来院政期点「君達蔵人(クラウト)如雲集、法音田地讓状「右、件田地者、法音房先祖私領也、而今源くらうどとのちやくしミやまつこせに、限永代、本券一通あひそえて、ゆつりまいらる事実也」弘安十(二八七)年二月廿四日(『鎌倉遺文』による)。

○かへり [色]「返カヘル還(中略)帰復翻変(以下一五字)已上同」(カ辞字)

○あやしき 4話注釈「あやしみ」参照。

【翻刻】

(10) 堀川院は末代^(まつくだい)の賢王^(けんわう)*也。なかにも*天下^(てんか)*の雑務^(ざつむ)*を殊に御意に入^(いれ)*させ給たりけり。職事^(しきじ)*の奏したる申文^(まをせ)*を召し取りて*、御夜居^(みやゑ)*に、又こまかに御覽して*、所々にはさみ紙^(かみ)*をして「此事たへぬ*へし、此事重て問へし」など、御手^(ごて)つから*書き付けて*、次日^(かじつ)*、職事の参たるに賜はせ*けり。一通^(いつつう)*こまかに*聞こし食す*事たにありかたき*に、重て御覽して、さまでの御沙汰ありけん、いとやむ事なき事也。すへて、人の公事^(こうじ)*つとむるほとなどをも、御意^(ごい)に入て御覽し定め*けるにや、追儼^(おんげん)*の出仕^(し)*に故障^(こうじょう)*申たる公卿^(こうけい)*、元三^(もとみ)の小朝拜^(せうてい)*に参たるをは、ことく*追入れ*られけり。「去夜^(こぞ)まで所勞^(しよらう)*あらんもの、いかてか一夜^(いちや)*の内に直る*へき。偽れ^(いつはり)る事也」と仰られけり。白川院は此間食て「聞くと聞か*し」とそ仰られける。あまり事*也と思食けるにや。

【注釈】

○末代 のちの時代。後世。将来。字類抄なし。靈異記「所造経疏長流末代」(上・序)、金刀比羅本平治物語「頼朝は〈中略〉末代^(まつくだい)の大将かな」(中・義朝奥波賀に落著事)。日ポには「Matqudai または Mardai」とあり、このマツダイに対する邦訳本注に「入声^(いりせう)の開音節化した形。類例に Butquji, Qiatagu などがある」とある。「仏事」は Butji も立頂し、「脚榻^(あした)」は「Qiatat」という方がまさる」と入声音の優位性を記している。マツダイ、ブツジは促音後の濁音。現代人としては違和感のある発音で、これに関する諸家の言説は高山倫明「促音のあとの濁音」『島大国文』二二号(一九九三)参照。

○賢王 続日本紀「古賢王有言」(和銅五年(七一二)九月己巳)、孟子・尽心上「古之賢王」。『富家語』には「賢皇ノ崩給時」(応保元年)とある。日ポ「Qenō(賢王)」以前の仮名書き例は未見だが、日ポの「Xinwō(親王)。ただし、発音はXima(シンナウ)王国の世継ぎの子」という記述があることからすると、「けんわう」は鼻音+W行だが、連声していない例ということになる。ただし、「連声は表記しない」という規範、すなわち一種の『仮名づかい』が存在

していたこと」(遠藤邦基「連声の表現効果」『國文學』七七、一九九八)は考えるべきで、現代までは残らなかったものの、ケンノーのような発音がなされていた可能性はある。「賢」は呉音ケン、漢音ケンで法華経音訓には「賢ケン」とある。平家読み方一覽(旧大系)で語頭濁音は「賢聖(ケンジョウ)」のみ。[韻]23 転喉音全濁四等^{ten}で、中国語の声門音を日本語の軟口蓋音で写したものの。「王」は32 転喉音清濁三等喻母^{huan}。

○なかにも その中でも。格助詞デが明確に分出する前なので、「ニ」が意味領域をカバーしている。2話の注釈を参照。枕草子・二六一・歌は「歌はふぞく。中にも、杉立てる門。神楽歌もをかし」、大鏡・六・道長下「なかにも、わかうより、十戒のなかに、妄語をばたもちて侍身なればこそ、かくいのちをばたもたれて候へ」。

○天下 日ボ「*Tenano* ヲサムル」。日国「てんか」語誌「呉音テンゲで読まれる場合は、仏典における用法が日常化したもので、天上界に対する地上界を言い、一方漢音テンカで読まれる場合は、国家・国土などの意で、両者は本来は系列を異にしていたと見られる。しかし、確証に乏しいので、漢字表記の例は便宜上本項に収めた」。日国発音・音史「中世・近世は「てんか」「てんが」「てんげ」の三様」。高野本平家には「テンガ」のフリガナあり。文明本節用集「天下(テンカ)」「テ態芸」。

○雑務 字類抄には無し。日ボ「*Zanu*」。易林本節用集「雑務 サフム」(サ言辭)。日国「ぞうむ」補注「日本史などでは多く「ざつむ」と読まれている」。続日本紀「大宝元年始建館舎、雑務公文、一准郡例」(和銅六年(七一三)九月己卯)。「雑」から始まる熟語を前田本字類抄で見ると、漢字に声点が差してあるもの三語で、いずれも入声点。「雑芸 サウケイ」は複声点、「雑袍 サフハフ」「雑丹」は単声点。和訓のみのもの「雑仕 サウシ」、声点・和訓ともないもの「雑怠」「雑色」「雑人」「雑乱」「雑事」「雑要」「雑促」。

○御意に入 ギョイはお考え。おぼしめし。色「心ココロ 意情」(コ人体)とあって「御意」は「みこころ」とも読める。権記「猶有愛憐之御意」(寛弘八年(一〇一一)五月二七日)、金刀比羅本保元物語・中・関白殿本官に帰復し給ふ事「左大臣殿院方に伺候の間、御意(ギョイ)の通ずること、世に隠れなし」(同じ箇所、半井本では「御心共

ノ通事」。「入る（下二段）」は、「知覚できる範囲内に置くこと、心にとめる、気にかける」意。28話、148話に「心に入て習ふ」があり、熱心に、関心をもつて習う意。平中物語・三一「ことに心に入ても思はぬことなれば、言ひさしてももの言ひやらで」、枕草子・八三・職の御曹司におはします頃、西の廂に「かう心に入て思たる事をたがへつれば罪得らん」、赤人集「飽かでのみ過ぎ行く春をいかでかはこころにいらて惜しまざるべき」。近世以降、貴人や主君などのおぼしめしにかなう・お気に入り意で「御意にいる（四段）」「御意に入り」という語が多く見られるが、時的にも意味的にも続古事談のこの例とは連続しないものと思われる。「参考例」虎明本狂言・鐘の音「此かねのねは、音もかたし、御意にいるまひ」、傾城禁短気「膝元去らずの御意に入にて」（六・三）。

○職事 十卷本「職事」（シ暈字、訓なし）。藏人等の宮中の職員。落窪物語・三「いづこの人ぞ」と問へば、『衛門督の殿の家司、しきじどもなり（中略）』とて、大鏡・時平「帝（中略）御気色いとあしくならせ給ひて、しきしを召して」。

○申文 上申書。兼盛集（九九〇頃）「申文にかきて奉る」、平家物語・一・願立「卅余人、申文をささげて陣頭へ参じける」、孝徳紀・大化二年二月「切諫陳疏、納於設置」（北野本卷二五鎌倉初期点）、岩崎本推古紀・八年（卷二二、平安中期末点）に「奏^{ウケマヨウリ}表（マウシフ）を」とある。

○めしとり（て） 上位者の命令で呼び取る。召し寄せる。竹取物語「鍛冶たくみ六人を召とりて（中略）蔵をあげて玉の枝を作り給ふ」（蓬萊玉枝）、台記・久安七年（一一五二）正月九日「上卿何人可召侍哉、皆自此召取て、可令参内之由、存思給者也」。

○御夜居 夜間、寝ないで詰めていること。権記・長保三年（一一〇〇）一〇月三十一日「自今夜、請^ニ教静阿闍梨、為夜居」、源氏物語・薄雲「よるなどいとたへがたうおぼえ」。

○御覧し（て） 「覧」は韻40転舌音齒・清濁一等^{am}で鼻音m+す（無声音）となるので、ゴランズと連濁する。室町時代にはゴラウズに変化しているが、敬意は維持している（玉塵抄・二〇「女宗の此を、こらうじてなをなをひさうさ

しむたぞ」、天草イソポ・ネテナボ帝王イソホに御不審の条々「コレヲ *gongjarete* 大キニ驚カセラルル」。近世には「おめへの所でもさう仕て御覧(ゴラウ) じろ」(浮世風呂・三・下) のような卑俗な例があり、この頃までには上一段化、補助動詞化が起こっている。

○はさみ紙 しおりや付箋のように目印をつけることだが、他の例は未見。ここでのハサムの意味は「物の間にさし入れて動かないようにする」で、**色**「挟ハサム于挿鋏(以下一二字略) 已上同」(ハ辞字) とあるうちの「挿」が動作的には対応するものだろう。宇津保物語・あて宮「うれへ文を作りて、文挟ぶんはさまにはさみて出立ち給ふ」。本の読みかけ頁にはさむものを「しおり」と呼ぶのは近世から。「付箋」は近代の例のみ。疑問や注意事項などを記して書物などに貼付(全面糊づけ)したものを「押紙(オウシ/おしがみ)」といい、院政鎌倉期の例がある。後二条師通記・寛治六年(一一〇九二)一〇月一四日「九条殿御日記於燈下一見了、所々有押紙 云々」、古今著聞集・一一・三九七「僻事ある所に押紙をして、そのあやまりを御自筆にてしるしつけて(中略)そのをし紙今にあり」。糊付けしなかったから「はさみ紙」か。時代が下ると「付け紙」「不審紙」がある。昨日は今日の物語・上「医書をあつめ(中略)合点のゆかぬ所につけがみを付る。(中略)『是はふしんがみとて合点のゆかぬ所に付て、後に師匠に問ふためにつける』」。

○たへぬ 諸本「たつぬ(尋)」とするが、F本では前後の字形比較から明らかに「へ」なので、「堪へぬべし」と解する。宇津保・内侍督「承りて身に堪へぬべきことならば仕うまつり、堪へぬことならば、その由をこそ奏しはべらめ」(仲忠↓朱雀帝)とあるように、「たふ」(下二)は負担できる、任に当たり得る、できる意。

○御てつから **色**「手テツカラ」(テ人事)、「手自テツカラ」(テ畳字)。万葉・五・八一三「真珠なす二つの石を(略)海上の子負の原にみ弓豆可良置かし給ひて」。

○かきつけ(て) 証拠や備忘のために書き留める。今昔に十例あり、いずれも「書(キ)付(ク)」。土左日記・冒頭「そのよし、いささか物にかきつく」、徒然草・序「心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば」。

○次日 今昔に「次ノ日」の例多数。ツギノヒと訓読みする。源氏物語・賢木「つきの日」(源氏大成校異編、底本は

大島本）。

○たまはせ **色**「給タマフ賜賜（以下一六字略）」（夕辞字、黒川本）。

○一通 新大系は「一返」、『注解』は「一通」で、校異では群類本のみ「一返」。しかし179話に仮名書きで「ひとかへり」が有り、同じような文脈なので、ここは「一返（ひとかへり）」の本文が勝ると思われる。「ひとかへり」は動作・事柄の一まとまり、一度、一回で、源氏物語や更級日記に複数例がある（若菜下「ただひとかへり舞ひていりぬるはいとおもしろく」等）。「ひととほり」は（1）雨などがさつと通り過ぎること。竹むきが記・下「雨にわか降りいでて、窓うつ音もおどろおどろし。されど」とをりにてやみぬれば、太平記「秋のしぐれ」通りして（二三・足利殿東国下向）、（2）最初から最後までさつと行なうこと。一回順を追うこと。申楽談儀・能書く様「石河の女郎の能は、十番を」とをりして、中年寄りて、元雅すべき能也」のような例が報告されており、F本他の「一通」は室町時代以降の改編部分とまでは考えておく。

○こまかに 名義抄に「細」「密」の和訓としてあり。字類抄は「こまか（なり）」が無く、「コマヤカニ（濃）」はある。宇津保物語・楼上・下「朱雀院こまかに御覧するに」。形容詞「こまかい」は近世から。

○きこしめす 話末に漢字で「聞食」と出てくる。『今昔』には「聞シ食ス」の例多数。名義抄には「聞」「聞（食）」の和訓としてキコシメスがある。

○ありかたき 日国語誌「難有」を漢籍や仏典ではアルコトカタシと訓み、存在することが難しい意で用いたが、和文系ではアリガタシが、めつたにない意で多く用いられた。類義語メツラシが、人の外見、筆跡、自然現象などについて用いられるのに対して、アリガタシは人の外見ばかりでなく、人の心の様子についても言及する点で異なる。」

○公事 **色**「公事」（ク暈字、黒川本、訓なし。十卷本、二卷本も同じ）。朝廷の公務。大鏡・三・伊尹「けふは公事ある日なれば、とくまゐらるらん」、とはずがたり「内外にうらみなければ、くじにつかうるに物うからず」（巻一）。

○御覧しされため 「見定む」の尊敬語。源氏物語・花宴「まだ、人の有様、よくみさだめぬ程は、わづらはしかるべし」。

【色】「定サタム(以下略)」「(サ辞字)。29話に「御門(中略)かやうの器量をレ覧レ取りたりけるにや」とあるのも「見取る」の尊敬語。

○追儼 【色】「追儼 ツイナ」(ツ疊字、黒川本)。「観」儼 ヲニヤライ(フ)「(仏上二九)。紫式部日記・寛弘五年二月三日「つこもりの夜、ついなはいとくはてぬれば」。大晦日の夜に行う、悪鬼(疫病)追放の儀式。後、節分の豆まきとなる。因みにオニの語源については山口建治「オニ(於邇)の由来と「儼」」「文学」一一の二、岩波書店、二〇〇一、＝『オニ考』トバでたどる民間信仰』辺境社、二〇一六所収)に、瘟(ラン＝中国南方の感染症)の字音の日本語化とする説が実証的に示されている(通説は「隠」↓オニ)。

○出仕 出勤。字類抄に無し。小右記・寛弘二(一〇〇五)年六月九日「不可出仕」、古事談・二・信長焼櫛椰車事「仍『今者不能出仕』トテ」、節用集「出仕」(文明本、シ態芸)(明応五年本、シ言語進退)。

○故障 【色】「故障 通避分 コシヤウ」(コ疊字)。さしさわり。九条殿遺戒「日々必可レ謁レ於親」。若有「故障」者。早以「消息」可レ問「夜來ノ靈否」。(十世紀中ごろ成立。群書類従による)。橋本博幸「平安古記録における〈故障〉(障(さほり)の併用をめぐる)」「国語学研究」三一、一九九二。「機械の故障」などの現代語的用法は近代からか。

○公卿 「公」は太政大臣、左大臣、右大臣を、「卿」は大・中納言、参議および三位以上の貴族をいい、あわせて公卿という。『礼記』燕義「不以公卿為賓」。蜻蛉日記・下・天祿三年「これは大臣レきやう出で給ふべき夢なり」。「公」は韻「レ転牙音全清一等 (Kōjū)」、レ「卿」は33転牙音次清 (K'ran) であり、上字韻尾レ + 下字レで連濁を起こしやすい環境にある。下学集「公卿クギヤウ」(器財門・前田本、亀田本)。日ボ「Cugunō」。

○小朝拝 元旦に天皇に拝賀する儀式。「こどうはい」と読むことについては、『古語大鑑』「こじョウハイ」項目【補説】に波多野流平家物語譜本などの濁音標示資料や「朝」字の呉音デウなどの根拠が示されている。

○ことごとく 図書寮本名義抄・心部「悉コト、ク」(上、上、平濁、平、平)とあり、三拍目が濁声点である。

○追ひいれ 「追ひ入る」(下二)は今昔「長者ノ家ニ五百頭ノ牛有り。朝ニ追出シ、暮ニ追入ル」(卷一の三四)とあつ

て「追い出す」と対の複合動詞だから、堀川院は追難をズル休みした公卿たちを追い出した（『注解』「追い払った」ということではないのではないか。今昔の別の例「盗人出来テ、公近祖子ヲ西ノ谷様ニ追ヒ入レテ、祖ヲモ子ヲ馬ヨリ引キ落シテ、衣ヲ剥テ」（卷一九の三六）や延慶本平家「砥並山ノ軍ニ山へ追入ラレテ、カラキ命生テ、京へ上リ」（第六本・盛次与能盛詞戦事）からは、相手に圧力をかけながら自由の利かないエリアに追い込む意と思われる。つまり該当者は小朝拜には参加させず、といって帰宅も許さず、隅に追いやって「いつはれる事也」という堀川院の認識を伝えたのだろう。日ボ「Voire, un, eia 鳥を追い出したり、獸を前へ追いやつたりする」（日国の訳）、同じく『補遺』に「また、人を追いかけて行って、ある場所に入らせる」（邦訳日葡の訳）とある。

○所勞 病氣。中右記・元永元年（一一一八）正月一六日「目之所勞出来、甚見苦也」

○一夜 訓読み「ひとよ」は、万葉集・一五・三六四七「我妹子がいか思へかぬばたまの比登欲もおちず夢にし見ゆる」、発心集・四三「よへぬれば悉く不浄となりぬ」（寛文十年刊本）、音読み「イチヤ」は、源氏物語・御法「一日」や忌むことのしるしこそはむなしからず」、発心集・四六「一夜の中にほろび失せぬ」（慶安刊本）、天草イソボ・ネテナボ帝王イソボに御不審の条々「何トシテコノ猫ガ *Yotinyano* ウチニ往キ来ヲシヨウゾ」、音訓不明のものに、大福光寺本方丈記「火イデキテ〈中略〉一夜ノウチニ塵灰トナリニキ」といった例がある。

○なをる 歴史的仮名遣い「なほる」。色「直ナヲシナオル較覚橋庭已上同」（ナ辞字、黒川本。十卷本も同じ）。

「橋」は「擣」で「矯」と同音で通用するという（『略注』中）。宇津保物語・蔵開上「心地よくなをり給なば参り給へかし」、兵範記・仁平三年（一一五三）九月二十五日「参鳥羽殿、法皇御惱、不食、未直給云々」。蜻蛉日記に「我が腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これをちせむやうは面に水なむ沃るべきと（夢ニ）見る」（天禄二年四月）とあるのは、漢語サ変「治す」と考えられる。観智院本名義抄「治」字の訓にナホル（ナホス）は無い（ヲサム、ハル、タモツ〈中略〉ツクロフ〈中略〉キヨシ、アキラカニ）。字類抄は「治イヤス」（イ辞字）、書言字考節用集「瘡（ナナル）、瘡（同）」（肢体・ナ）。「治す」の使用はいつからか。浮世風呂・大意「湯を以て身を温め、垢を落し、病を治し」の

ような例からは、幕末でもいまだ「治」にとつて「ナホス」が定訓化していないことが窺える。ヘボン三版(一八八六)でもナオス・ナオルは「瘡」、『言海』(一八八九)の「なほす(直)」には、「(一)直クナス。正シクス。(二)ツクロフ。(三)癒ス。治ス。『病ヲ(ナホス)治』とある(語釈の「治ス」は「ぢす」だろう。立項もされている)。「直」字に付された記号は(和の通用字)、「治」の二重傍線は(漢の通用字)であり、右のような使用状況を反映する認識といえる。佐藤亨「近世の漢語についての一考察」「療治」「治療」をめぐって『国語学』一〇六(一九七六年)に「イヤス」「ツクロフ」などの和語に関する考察もある。

○いつはれ [色]「偽イツハル詐(以下二三字)已上偽(イ人事)」。『略注』上(三一頁)に誤写や通用などの詳しい考証がある。日国語誌「平安初期には「うつはる」の形もあつたが、中期以降、専ら「いつはる」だけが用いられるようになった。類義語「あざむく」が、人を意のままにあやつる、だましそそのかす意が中心であるのに対し、「いつはる」は、自らの本心や真実を隠すために、虚偽を主張する意を本義とする。」

○きくともきかし 陽明文庫本平治・上・光頼卿参内事「二と云ひながら、忍び笑ひにぞ笑ひける。」(新全集、新大系とも訳は「聞に耳、石に口といふ事あり、聞くとも聞かじ」と云ひながら、忍び笑ひにぞ笑ひける。)(新全集、新大系とも訳は「聞いたにしても聞かなかつたことにしよう」。この引用文の「あれほど」以下が他本では、金刀比羅本「あれほどに不覚に見ゆるぞ、とぞ申しける」(蓬左本もほぼ同じ)、半井本「アル程フカクゲニ見ルゾ、ト申ケル」、よく似た本文でも宮内庁書陵部蔵古活字本「壁に耳、天に口といふ事あり、おそろしおそろし、きかじ」であり、「聞くとも聞かじ」はなかなか現れないが、続古事談はほぼ異同が無い(『注解』によれば神本「き、とも」、賀本「つくとも」)。

○あまり事 余分なこと。行き過ぎたこと。字類抄なし。今昔物語集・五・二〇「象許ニ乗テ糸善カリツルヲ、師子ニ乗ルガ余リ事ニテ有ル也」、源氏・真木柱「二いかに面目あらまし」とあまり事をぞ思ひて(御物本、横山本、為家本など。大島本は「あまりのこと」)。

【翻刻】

(11) 堀川院、位*の御時、坊門左大弁為隆、職事にて太神宮*の訴へ*を申入*けるに、主上*御笛を吹かせ*給て御返事*もなかりければ、為隆、白川院に参て、「内裏*には御物気*おこらせ*おはしましたる。御祈はしまる*へし」と申けり。院おとろかせ給て、内侍に問せ給ければ、「さる事、夢にし侍らす*」と申けり。あやしみて、為隆に御尋あり*ければ、「その事に侍り。一日*、太神宮の訴*を奏聞*し侍しに、御笛をあそはして*勅答*なかりき。『これ御物の気*ならすは、あるへき事にあらず*』と思て申侍し也」と申ければ、院より内へ*そのよし申させ給けり。御返事には「さる事侍りき。た、の*事にはあらず。笛に秘曲*を伝て*、其曲を千遍*吹きし時、為隆参て事を奏しき。今二三反*になりたれば、吹き畢て*、言はんと思ひしほとに、尋しかは、まかり出にき。それをさ申ける、いとほつかしき事也」とそ申させ給ける。

【注釈】

○位「くらゐ」は「座(くら)居(ゐ)」という語構成らしく、天皇の地位にあること・在位をいう。源氏物語・薄雲「一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、更に親王にもなり、くらゐにもつき給ひつるも、あまたの例あり」

○太神宮 だいじんぐう。伊勢の皇大神宮(天照大神をまつる宮)。延喜式「太神宮三座(中略)天照大神一座 相殿神二座」(四・神祇・伊勢太神宮)、日ボ「Inga」。「神」は呉音ジン、漢音シン。嵐義人「大と太、小と少 養老職員令に探る」(『國學院雜誌』一一六ノ四、二〇一五)がある。「太政大臣」など、「太」は「小」と対をなさない、唯一で最高のもので言えそうだが、ダイという語形の根拠は何か(呉音タイ・タ、漢音タイ、慣用音ダ)。「大」(呉音ダイ、漢音タイ)との通用が成立し、「太」が「大」の異体字のような扱いになったのだろうか。

○うたへ うったへ(訴)の促音無表記。図書寮本名義抄「訴 ウタフ」(法・言部)とあり、和訓の声点は上から、入声・上声・平声で、ウツタフという発音を記したものと考えられる。大唐西域記長寛元年(一一六三)点には「被

詔^{ミコトノリ}人」(巻二、遠藤後掲書・一四〇頁による)とある。古形はウルタフ。平安中期以後「る」が促音化(古語大鑑)。天理本「金剛波若経集驗記」平安初期点(八五〇年頃)では「来訴縣尉」の訴字の紙背に「ウルタフ(宇ル太フ)」とあり(古典保存会複製本(一九二四年)一卷の九頁)、新撰字鏡「奴詔也訴宇留太不」、高山寺本名義抄「奴ウルタフ」(観智院本は「奴ウタフ」とあって「ル」が挿入なのか置換なのか分からない)にも見られる。遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究』一九五三(再版一九七二)「うたふ」か「うるたふ」か(一三九頁)。

○申入 外から内に向かって申しあげる。また、他を通して話などを通じ申しあげる。「言ひ入る」の謙讓語形。今昔物語集・四・二五「人ヲ以テ案内ヲ申入レム、今鏡・三・花園の匂ひ「檜扇の片端^{かたつま}引き折りて(歌ヲ)書きつけて、御たちの中に申いれさせける」。

○主上 [色]「主上 帝王部」(シ暈字、訓なし)。天皇の尊称。続日本紀・神護景雲二年(七六八)七月辛丑「告大丘曰、今主上^{しゅじやう}大崇儒範、追改為王」、金刀比羅本保元物語・上・親治等生捕らるる事「主上^{しゅじやう}ことに叡感あつて」、文明本節用集「主上シユシヤウ指帝王」(シ人倫)、日国語誌「上」は漢音が「シヤウ」呉音が「ジャウ」で、「落葉集」に「主上しゅしやう」、挙例の「天草本平家」に「xkoシユシヤウ」とあるように中世までは「シユシヤウ」と清音だったようである。挙例の「延宝八年合類節用集・三」には「シユジャウ」とあり、江戸時代になって濁音も使われはじめたらしい。(中略)明治以後は濁音に定着した。」。

○ふか(せ) [色]「吹フク 鳴歎嘘(以下三字) 已上同」(フ辞字、黒川本)

○御返事 訓よみか音よみか。源氏物語・夕顔「口とくかへり事などし侍き」。日国は「へんじ」の例として落窪物語「たえて御かへりなし。(略)なかははかなきへんじをだに絶えてなき」(巻二)を挙げるが、引用元は旧大系、すなわち木活字本であり、これをもって直ちに平安時代の例には出来ない。校注者松尾總もこの底本採用を「冒険」と表現し(二七頁)、「へんじ」については補注一三九(二五九頁)で「かへりごと↓返事↓へんじ」という伝写過程を推定している。ここを「返事」と漢字表記するテキストに九条家本(新大系)がある。同様の事例は『とりかへばや

物語 本文と校異（鈴木弘道、一九七八）にも指摘があり（二二五頁下段）、伝本に恵まれない統古事談もまた慎重な検討が必要だということである。ところで『宇治拾遺物語』（二例）は、一つが仮名書き「かへりこと」で恋文（女）、もう一つが漢字「返事」で男同士の手紙であり、諸本間に異同が無い。日ポには「Cayericoo 書状の返事。女性のことば」（「Peni」項目は特に注記なし）と位相注記があり、〈漢字表記↓字音読み〉の過程における男女差・意味差などをまずは仮定してみた。が、古本説話集は「かへり事」4例、「返事」2例で動作主体の性差は無い。法華百座聞書抄にも「薬王菩薩（中略）」ト仏二問ヒ奉リ給フニ、法文ニモ論儀ニモ『ソガ内ヲ問ハバ又ソガ内ノ事ヲ答ヘヨ』トコソ申セバ、ソノカヘリコトヲコソノタマウベキニ、仏此カヘリ事ヲバノタマハズシテ」（三七三行）とあり、平安末期においてカエリコトの女性語化や漢字表記の「返事」を（男子同士の）問答に使う、というようなこともない。饅頭屋本節用集「返報（返報）―答（答）―進（進）―事（へ言語）、文明本節用集「返事（返事）（へ態芸）とあり。一五世紀中頃には和製漢語ヘンジが成立している。旧大系の「平家読み方一覽」「謡曲読み癖一覽」に「オンペンジ」とある。

○内裏 色「内裏 タイリ」（夕暈字、黒川本）。十巻本も同様だが（夕篇）地儀門に収録、二巻本は「内裏」（夕地儀、訓なし）。「内」は呉音ナイ、漢音タイ。桓武天皇による漢音奨励の勅は七九二年。「内裏」は日本書紀や万葉集（題詞、左注）にも現れるが、現行注釈書では音読みせず、通常「（おほ）うち」と訓んでいる。枕草子「いまのたいりの東をば北の陣といふ」（九）

○物氣 貞信公記・抄・延喜一九年（九一九）十一月一日「庚辰、依病不參、五節一人忽煩物氣」、枕草子・一八一・病は「病は胸。物のけ。あしのけ」。今昔に「陰陽師、『此レハ物ノ氣也。但シ、人ノ為ニ害ヲ可成キ者ニハ非ズ』（中略）『銅ノ器ノ精也。（中略）ト占ヒ申ケレバ』（卷二七の六、鈴鹿本）とあるように、人に害の無いものもモノノケの範疇である。色「物恠 陰陽部 災異」（モ暈字、訓なし）とあるが、これと『今昔』卷一四の四五「様々ノ物怪有ケレバ、占トスルニ、異国ノ軍発テ可来キ由」の例を旧大系は音読みしてモツケ（モツクエ）の例とする。同じ箇所を新大系は「ものものけ」と読み、新編全集は「ものものとし」と読む。坂詰力治「半井本『保元物語』に見

る漢語二題―「曳奏」「物怪(勿怪)」―『文学論藻』八二、二〇〇八。

○おこら(せ) 穏やかな状態のところに、それをさわがせるような物事や状態が生じる。土左日記・承平五年二月八日「やまひおこりて」、平家物語・二・烽火之沙汰「天下に兵革(≡戦争) おこる時」、方丈記「ヲホキナルツジ風ヲコリテ。日国補注『おこる』と『おきる』とは共に『おこす』に対する自動詞で、出来事の発生を表わす意義も似通うが、『おこる』は発生した出来事が勢いや発展性や持続力をもつ場合に使うことが多い。『事故』が『おきる』に、『事件』が『おこる』になじむのはそのためである」。

○祈はしまる 「いのり」は怨霊の降伏(しんぷく)を山伏や僧侶によって神仏に祈ってもらうこと。個人的な心的行為としての「祈る」も中古にあるが、「はじまる」という語からも準備のある儀式だとわかる。源氏物語・桐壺「今日はじむべきいのりども、さるべき人々うけ給はれる、今宵より」ときこえいそがせば」

○夢にし侍らす 「ゆめに」は打消しを伴って「全く」の意味になる(「ゆめにも」の形でなくていい)。内侍の言葉としては「知りません」か「ありません」とあるべきで、「し(侍らず)」を動詞とは考えにくい。F本の「し」は副助詞、「侍り」は本動詞とみて「夢に侍らず(ゴザイマセン)」と解釈するのだろうか。新大系・賀本・群類本「夢にも侍らず」。注解「夢にし侍らず」、岩本「夢にもしらず」。

○御(尋)あり 〈御+動詞連用形または動作性漢語名詞+あり〉の形で敬意の高い尊敬表現となる。続古事談は早い例かもしれない。古今著聞集・九「荒祭宮、齋宮の内侍に御託宣あり、『祭主配流しかるべからず』とありけり」、太平記・三・主上御夢事「少し御まどろみ有ける御夢に」。古語大鑑では動詞アリの用法として「行為を存在表現として叙述し、その婉曲化を利用して、敬意を担わせる」と説明されるもので、「御」を使わない尊敬表現+アリの形(太平記・一・資朝俊基関東下向事「君しばらく観覧有て」)や、「御」が付かずその分だけ敬意の軽い例(左の例の②)も寛一本平家物語に見られる。次の例は平家物語における、大将の地位を狙う三者の地位(①②③)と敬語。

太政のおほいと(中略)大将を辞し申させ給ふ事ありけり。時に徳大寺の①大納言実定卿、その仁に当たり給

ふ、由聞ゆ。また花山院の⑧中納言兼雅卿も所望あり※。その外、◎故中御門の藤中納言家成卿の三男、新大納言成親卿も平に申されけり。（一・鹿谷）※この箇所、長門本では「花山院の兼雅も所望せられけり」

この語法は現代語には「(とくと) ご覧あれ!」の形でだけ残存しており、近世前期まで遡れば、『冥途の飛脚』上に「御損はかけませぬ。お氣遣あられな」のような例も見える。さらに遡って『ロドリゲス日本大文典』には「動詞に接続する尊敬及び卑下の助辞に就いて」（土井訳本五八二頁）で「アリ、アル」について次のようにあって、室町末期には「御+尋ね+あり」型の和語の連用形を使うものの敬意が下がっているようである。

○この存在動詞は、尊敬の助辞オを冠したあらゆる動詞の語根の後に置かれて、ラルルよりは高い程度の敬意を表す。普通には同輩とその面前で話すのに使ひ、或いは少しく目下に当る者と話し、又はその場に居ない目上の人に就いて話す場合に使ふのであって、話し言葉では極めて広く行はれる言ひ方である。例へば、才読ミアレ、オ上ゲアツタカ?、才習ヒアラウカ?

○動詞の語根の後にアリ、アルを添へたものは、主人が尊敬する召使と話し、親が成人した子供と話し、或いは(中略)従属関係のない賤しい者共とかと話す場合には使ふけれども、敬意は極めて低い。例へば、食ヒアツタカ? 書キアルカ? 聞キアルカ? 等。（附則一）

○動詞の意味を持った「こゑ」の語の後に添へられた場合には、オの代りにゴ(御)の助辞をそれに冠する。さうしてデウスに就いて話すのにさへこの言ひ方ができる程の敬意を含んでゐる。例へば、御覧アル。御存ジアル。御分別 (Gofunbet) アツタカ? (附則二)

○一日 ひとひ。過去のある一日。ある日。先日。蜻蛉日記「野分のやうなることとして、二日ばかりありて(兼家ガ)来たり。『ひとひの風はいかにとも例の人は問ひてまし』と言へば(上・天曆一年)

○訴 F本のこの字は一般的には「祈」に見える。「訴」には旁を「斤」とする俗字もあるが、この例は偏を崩した形が「言偏」ではなく「示偏(ネ)」であり、すぐ前の「御祈」とまったく同じ形。『注解』校異によれば、「訴を」と

するのは伴本と群類本のみで、「祈を」は賀本、岩本、神本(但し傍書「訴」とあり)の三本。新大系(小林本)は「訴」。しかし『音訓引き古文書字典』(柏書房、二〇〇四)の「訴訟」の例として、言偏に右下がりの点を打つものが確認された(三七六頁中段)ので、江戸期の「訴」字の一つの形とみなすことにした。13話にも同じ字形の「訴」がある。

○奏聞 [色]「奏聞ソウモン」(ソ暁字、黒川本)

○あそはし(て) 大鏡「和歌もあそはしける」(二・良房)。日国語誌「意味は徐々に「あそぶ」意から広がったが、〈中略〉中世の「平家物語」(覚一本)でも、書く意、演奏する意、読経する意、詠ずる意、射る意であり、一般的なする意の用例は、中世末期から近世初期を待たねばならない。」

○勅答 天子が臣下に答えること。[色]「勅答 政理分 チョクタウ」(チ暁字)。貞信公記・抄・天慶九年(九四六)六月二〇日「義方朝臣来賜勅答」。

○あるへき事にあらず ここは文字通り「あるはずのことではない」という意味になる(源氏・真木柱「ついでなくて、あるべきことにあらず」)が、派生して「すべきではない(とんでもない)」の意にもなる。例としては宇治拾遺「返って悪しき事出来なん。あるべき事にあらず」(一九七・盗跖と孔子と問答事)などが挙げられる。

○内(へ) 朝廷に関する人やものごとを直接に言うことをはばかって間接的に示す語。帝へ。延喜十三年亭子院歌合(九一三年)「左はうちの御歌なりけり。まさに負けむやは」、伊勢物語・六「太郎国経の大納言、まだ下臈げらふにて内へまゐり給ふに」。

○たたの ただの。普通の、ありふれた、日常の。栄花物語「柿などさすほど、ただのことに、変かはりてをかしく見ゆれど」(三二・殿上の花見)

○笛(秘曲)を伝て 注解「笛(の道)で秘曲の伝授をうけて」。「伝ふ」(下二)は、現代語ならば「AがBにCヲ伝える」の文型が標準的だが、事物を受ける方に重点を置く用法がかつてあった。方丈記「わが身、父方の祖母の家をつたへて、久しくかの所に住む」が類例で、「秘曲ヲ受ケ継グ」という訳になろう。「ヲ+つたふ」の形は、128話、

134話、139話、152話にある。

○秘曲 秘伝の楽曲。顕昭古今集註・卷二八「琵琶ノ秘曲ウカガハン」（二一八五年）、古事談・六・吉備津宮所望元王秘曲事「吹皇帝以下秘曲等之間」、天草イソボ・蟬と蟻「夏秋歌イ遊バレタ如ク、今モ *hibi onnono* ツクサレテ」。

○(千)遍 動作、作用の回数を数えるのに用いる。度。回。日本霊異記・三五「法師復曰『斯下賤王、千遍痛病、万遍痛病』」、天草ヘイケ「鶴コソ群レイテ遊ブメレ」ト、ヲシ返シヲシ返シ *sande* (三遍) マデ歌ウタレバ、見聞ク人ミナ耳目ヲ驚カイタ」（二卷・一・祇王）。「千」は韻山撰で韻尾は *n*（鼻音）なので、センベンと連濁したと見る。葛洪（二八三―三四三）『抱朴子』に「教之但讀千遍、自得其意」とあり。詳しくは次項と合わせて別稿準備中。

○今二三反 「今」は副詞。あと。もう。事態の完了までに必要な数量の前に置く。万葉集・八・一六二「わが宿の菝花咲けり見に來ませ今二日許（*ま*）あらば散りなむ」、土左日記・承平六年二月一日「貝のいろは蘇芳に、五色にいまひといろぞたらぬ」。「反」は名義抄に「カヘルカヘス（中略）禾ヘン・ホン」とあって、中国での漢字の用法には回数を数えるようなものは無いが、カヘリと訓じたか、あるいは「ヘン」という和音で「遍」と通用したものかと思われる。○ふきはて [色]「終ハテ畢竟已上同」、「果ハタス」（ハ辞字）。今昔のハツは全て「畢」。日国語誌「(1) 類義語として「おわる」があげられる。基本的には、「おわる」が継続中の動作・作用の終止を原義とするのに対して、「はてる」は限定された物・期間などが、その終局に到達することを原義とするという違いがある。(2) 平安時代には、仮名文では（中略）もっぱら「はてる」を用い、一方、漢文訓読文では「おわる」を用いるという文体による使いわけが見られる。(3) 補助動詞の用法でも、平安時代の和文では、「はてる」が「おわる」を圧倒しているが、中世以降は、このような文体差がほとんど見られなくなり、次第に「はてる」は衰退していく。岡野幸夫「平安・鎌倉時代の和文における「はつ（果）」「をはる（終）」の意味用法…補助動詞的な複合動詞後項の意味用法の通時的研究のために」

『国文学攷』一五二号、一九九六

（つづく）